

社内通訳者の役割

— CGアニメーション制作会社における通訳者事例研究 —

田中 心子[†]

Roles of an In-house Interpreter

— A case study of an interpreter in a CG animation studio —

Motoko Tanaka

1. はじめに

筆者が勤める東京都内のCGアニメーション制作会社には、様々な国籍の外国人スタッフが常時30名ほど働いており、日本人スタッフと日本語を解さない外国人スタッフとの間のコミュニケーションは英語でおこなわれている。また、海外、主にはアメリカのクライアントから受注する作品制作があるため、それらのクライアントとの会議も日常的に英語でおこなわれている。これら日本語・英語でのコミュニケーションを専門に担うチームが社内に置かれており、筆者もそこに在籍し、通訳・翻訳業務をおこなっている。現在は正社員だが、そうでない時期も含め20年近くこの会社に勤務しており、通訳・翻訳チームには14年ほど所属している。日々、様々な通訳現場で仕事をする中で、言葉の橋渡しの通訳という意味では仕事はこなせているはずなのに、うまくいかないと感じたり何か違和感を覚えたりすることがある。その違和感の正体は、社内通訳というものの役割を明らかにすることで見えてくるのではないかと考えた。

研究の方法としては、筆者自身が日々おこなっている通訳業務の中でうまくいかなかったり、何らかの違和感を覚えたりしたことをフィールドノートに記録し、それと並行して、通訳の役割論と倫理観についての先行研究を調べ、フィールドノートの内容を先行研究と照らし合わせて理論的な分析をおこなうという形をとった。

2020年に執筆した修士論文では、社内で日々通訳という業務をおこなっている筆者自身の経験を通して、社内通訳者の役割を明らかにしたいと考え、考察をおこなった。その後、2020年の初頭から始まった新型コロナウイルスの流行によりリモートワークが推進され、通訳の様相も様変わりした。コロナ前と比べて同時通訳の割合が格段に増え、Zoomの言語通訳機能を使うことにより、通訳者の存在がより感じられにくくなった。本稿では、そのことにつ

いても考察を加える。

2. 通訳者の役割と倫理観

2.1 通訳の役割論

武田 (2013a) によると、1919年に開催されたパリ講和会議以降、通訳の専門職化が進み「正確で過不足のない訳出のみに徹する」(p.162) というような通訳者の役割を具体的に示す動きが出てきた。それに伴い、通訳者は機械や導管、空気のような存在、黒子、目立ってはいけない存在、という考え方も生まれた。「通訳者は『人ではない存在』として、対話者間で中立的立場にいる者だと考えられた」(ポエヒハッカー, 2008, p. 178) ののである。そして通訳を職業としている者は多かれ少なかれ「黒子」としての役割を認識している。しかし、通訳場面によっては見えない存在のはずの「黒子」からコミュニケーションの「参与者」になることもある。カナダ、メキシコ、アメリカ合衆国で通訳者が通訳の役割をどう意識しているかについて調査したAngelelli (2004) も、通訳の場によってニーズも制約も違えば通訳の役割も違い、自分は「見える存在」であると認識している通訳者も多くいることを導き出している。通訳の役割についての先行研究からは、通訳者が「参与者」や「見える存在」になる場合があることがわかった。

鳥飼 (2007) はオーラル・ヒストリーという手法を取り、5名の同時通訳パイオニア(西山千, 相馬雪香, 村松増美, 國弘正雄, 小松達也)にライフストーリー・インタビューをおこなっている。その中で鳥飼はゴフマンの「参与フレームワーク」を使い、「話し手」の概念に基づいて通訳者の役割を分析している。「参与フレームワーク」とは、ゴフマンがその著書*Forms of talk* (1981) の中で提唱した概念で、トークというものは従来考えられていたように話し手と聞き手の間でだけ行われるのではなく、その場に参加している人すべてがお互いの関係において何らかの

[†] 2020年度修士 (人文学プログラム)

「参与ステータス (Participation status)」を持っておこなわれるとする考え方である (Goffman, 1981)。「聞き手」には「正規の聞き手 (ratified participant)」と「正規でない聞き手 (unratified participant)」があり、「正規の聞き手」には「話しかけられている聞き手 (addressed)」および「話しかけられていない聞き手 (unaddressed)」があり、「正規でない聞き手」は「盗み聞き (eavesdropping)」をする人、「立ち聞き (overhearing)」をする人、そして「傍観者 (bystander)」であるとする (Goffman, 1981)。また、ゴフマンは「話し手」も「発声体 (animator)」, 「作者 (author)」, 「本人 (principal)」の3種類に区別している。「発声体」は唇を上下させ口から声を出す「サウンディングボックス」であり、時にそれはスピーカースystemや電話などと組み合わせられ「トーキングマシン」になる (Goffman, 1981)。「作者」は表現するための言葉を選び記号化する者、そして「本人」は話される言葉によってその信条などを明らかにし、その言葉に責任を持つ者、とする (Goffman, 1981)。通訳者は「対話者の間に立ち、正規の聞き手としての立場が曖昧な『話しかけられていない聞き手』としてトークに参加する」(鳥飼, 2007, p. 235)。その場合、ゴフマンが言う口を動かして声を出すだけの「発声体」なのか、発話の表現者である「作者」になるのか、それとも言葉に責任を持つ「本人」になるのか、を鳥飼はインタビューから導き出そうとしている。そして5名とも発言者を代弁するという「発声体」の役割は意識しつつも、状況によっては「作者」になり、めったにあることではないが「本人」にもなることがある、ということがわかった。

高橋・木村 (2017) はコミュニケーションの重要な仲介者としての通訳を社会言語学的見地から研究する必要があるという認識をもち、その研究で日英でのビジネス接触場面を取り上げている。日本人はその大多数が英語学習の経験を持っていると想定され、ビジネスの接触場面では通訳をもちいる場面と当事者同士が英語でやり取りをする場面が見られる。そのような通訳場面で仕事をする日英のビジネス通訳者8名に構造的インタビューを実施し、通訳の「使い分け」について「通訳を使うかどうか」と「どのように通訳を使うか」に焦点を当て、考察している (高橋・木村, 2017)。さらに高橋・木村はこの2017年の研究の継続調査として、2018年にもさらに4名の通訳者およびクライアント (通訳を依頼する人) にインタビューをおこない、通訳の「使い分け」と通訳を使う場合のメリットについて考察し、「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか?」 (高橋・木村, 2018) という問いを検証している。これらの問いを通して高橋・木村は「通訳という形態を持つ付加価値や限界を明らかにし」 (高橋・木村, 2017, p. 2), 「現在のビジネス通訳の場面がどのような環境におかれていて、通訳者には何が期待されているのかを探る」 (高橋・木村, 2018, p. 92) としている。

まず、「通訳を使うかどうか」については、2017年の調

査では「場面の性格に応じた使い分け (公式度)」, 「心理的な理由による使い分け (不安・正確性)」, 「負担軽減のための使い分け (時間・労力)」 (高橋・木村, 2017, p. 5) がみられ、2018年の調査でさらに「相互行為の分担のための使い分け (間の利用・責任)」 (高橋・木村, 2018, p. 96) がみられた。そして、「どのように通訳を使うか」については、「時間の経過による使い分け」, 「訳出の方向による使い分け」, 「話の内容 (話題) による使い分け」, 「会議の参加者による使い分け」がみられた (高橋・木村, 2017)。

「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか?」 (高橋・木村, 2018) という問いについては、通訳を使うメリットとして「円滑かつ正確なコミュニケーション」以外に見出された「認知機能の確保」, 「時間稼ぎ」, 「さらなる相互行為者」, 「仲介的な同伴者」, 「情報源」という項目がまさにその答えと考えられる、とし「相互行為の担い手や同伴者や情報源という、より積極的なその場の構成員という役割もビジネス通訳においては求められることがある」 (p. 105) と述べている。

辻 (2006) は、自身も企業内通訳者として一企業に勤務していた経験を踏まえて、ビジネス通訳について考察している。その論文の中で、辻 (2006) は、英語が使える人でも、重要あるいは複雑な案件が話される場合、直接自分が英語で交渉せずに逐次通訳を使うことがあり、その目的は「交渉優位」に立てるからである、としている。日本語での発言が英語に訳される前に内容を確認したり、発言を修正したりできるためであるとしており、これについては高橋・木村 (2018) の研究でも、複数の通訳者およびクライアントが言及している。

溝口 (2009) は、通訳者におこなったインタビューを元に通訳者の役割に関する94項目を立ててクラスター分析をおこない、通訳の6つのスタイルと2つの機能を導いている。6つのスタイルは「言葉を訳す」, 「省略して訳す」, 「見えない存在」, 「予測・推測をして訳す」, 「文化も訳す」, 「見える存在」であり、2つの機能は「訳し方」と「関わり方」である (溝口, 2009)。「訳し方」には「意識」と「直訳」があり、「関わり方」には「受動的」と「能動的」がある。溝口 (2009) によれば、「意識」とは「話者の話を聴衆にわかりやすいように文化差の説明などを加えて訳す訳し方」 (p. 74), すなわち「分かりやすく直して訳す」 (p. 74) ことであり、「直訳」とは「話者の話にも付け加えずそのまま訳す訳し方」 (p. 74), すなわち「そのまま訳す」 (p. 74) ことである。また、溝口 (2009) は、「関わり方」の「受動的」とは「話者の陰に隠れて訳すことだけに徹する場合」 (p. 74), すなわち「『黒子』に徹する」 (p. 74) ことであり、「能動的」とは「場の雰囲気を盛り上げるように訳す」 (p. 74) など「訳す以外にも役割を担う」 (p. 74) ことであると述べている。溝口 (2009) が見出したそれぞれのスタイルと機能の関係は以下の通りである。

表1 通訳のスタイルと機能

スタイル	機能	
	訳し方	関わり方
言葉を訳す	もともと直訳的	主に受動的
省略して訳す	直訳的	主に受動的
見えない存在	主に意識的	もともと受動的
予測・推測をして訳す	意識的	受動的
文化も訳す	意識的	主に能動的
見える存在	意識的	もともと能動的

溝口（2009）p. 77 より一部改変

それぞれの訳し方の関係を見ると、クラスター分析を行った94項目においては29項目が直訳に、65項目が意識に分類され、意識的な訳し方が多いという結果になった。また、それぞれの関わり方の関係では57項目が受動的に、28項目が能動的に分類され、中間的なものが7項目であり、受動的な関わり方が多いという結果になった（溝口，2009）。溝口（2009）はこれにより、通訳者の役割に「言語的」機能である「訳し方」と「社会的」機能である「関わり方」という2つの機能があることが示されたとしている。また、全体として、「意識的」で「受動的」な役割が多いという結果が出ていることから、溝口（2009）は実はこれが通訳者の平均的な姿勢であり、「直訳的」で「受動的」とされる「黒子」と、「意識的」で「能動的」な「参与者」という役割は通訳の極端なあり方と言えるのではないかと述べている。

この分析結果から、溝口（2009）は通訳の役割としてよく言われる「黒子」と「参与者」には収まらないスタイルがあるとしている。また、「通訳者の役割は、『訳し方』（言語的機能）と『関わり方』（社会的機能）という2つの機能を区別して研究されるべきであろう」（p. 81）とも述べている。

先行研究からは、現場で実際に通訳をおこなっている通訳者の役割の多様性が見えてきた。通訳の役割とは第一にある言語で発せられたメッセージをその場で別の言語に訳して伝えるということであるが、それ以外にも原発言者の意図を汲んで言葉にしたり、会議参加者同士が争わないように気を使ったり、情報源になったりもするということがわかった。筆者の場合を考えてみると、社内での通訳でも場によって通訳の仕方を変えていると感じる。役員会議や経営会議などでは正確性を重んじ、なるべく誤訳を少なくすることに気を使う。激高したスタッフが罵りに近い言い方をした場合はやわらげたりもする。新しく入社してきた外国人スタッフが初めてプロジェクトチームの会議に参加する時などは、社内ではか通じないと思われる言葉はなるべく別の言い方に直し、伝わりやすくする。クライアントとの電話会議などでは、つい回りくどい言い方をしがちな日本側からの発言を結論から訳出し始めたりする。また、「前回の会議の時に」のような発言があった場合、前回の

会議も自分が通訳者として参加してその内容を覚えていれば、その場で話されたことを要約して伝えるなどして思い出してもらったりもする。

2.2 通訳者の倫理観

通訳の役割，ということを考える際には通訳者の持つ倫理規範を考えることも重要である。「規範と倫理の問題は通訳者の役割と密接に関連し、究極的には通訳者のアイデンティティの問題に繋がる」（鳥飼，2007，p. 55）からである。鳥飼（2007）はその著書の中でさかんに倫理観という言葉を使っているが、日本には通訳全般に関する倫理規定がまだに存在しない。日本において倫理規定が設定されているのは、手話通訳者や通訳案内士の団体など少数に限られる（武田，2013b）。また、2010年に作成された「医療通訳共通基準」には倫理基準の説明があるが、その他の分野については明確な倫理規定は存在しない（武田，2013b）。日本のプロ通訳者が持つ指針について辻（2006）は、それぞれの通訳者が指針を持って働いており、それは所属する通訳派遣会社や人材派遣会社が定めたものや、通訳訓練や実務を通して学習したものである、と述べている。

朱（2019）は、中国の日系企業内で日本語-中国語の通訳をおこなっている中国語母語話者へのアンケートで、109人のアンケート協力者のうち、91.74%が高等教育機関で日本語を学び、72.48%が同機関で通訳・翻訳の知識を得ており、専門的な通訳・翻訳の訓練は受けていないという結果を導いた。朱（2019）の研究に参加した日本語-中国語の通訳者は、倫理観をほぼ実務を通して学習したと考えられる。ただ、研究の調査に協力した通訳者の平均年齢は28.6才と若いことから、朱（2019）は「本研究の対象である通訳者はおそらくまだ規範意識を形成しているところである」（p. 129）と述べている。

平塚（2014）はその博士論文で、オーラル・ヒストリーの手法を用いて日中通訳者へのインタビューをおこない、通訳規範意識を研究している。この研究で調査対象となっている6人の通訳者の経験年数は1人のみ2年と短い、残る5人は2人が22年、1人が25年、そして2人が30年と長い。平塚（2014）によれば、経験が2年の通訳者はその語りの中で「通訳学校で講師から教えられた」（p. 131）ように通訳をおこなったと述べる場面はあるが、数回の現場を経験して「すでに原文に忠実に訳すケースと調整を行うケースを体得して」（p. 131）おり、「それぞれの状況の判断は自らが主体的に行っている」（p. 131）という。経験の長い通訳者は、失敗して仕事を失う経験をしたり、クライアントなどから求められる役割を意識するようになったりして「空気（という存在）を超えることはしない」（平塚，2014，p. 131）という規範意識を持つようになった。平塚（2014）は通訳者の語りから、「通訳経験を経ることにより、規範意識の変化が起こることが示された」（p. 131）としている。

瀧本（2006）はオーストラリアで通訳者として全国翻訳者通訳者認定機関（NAATI, National Accreditation Authority for Translators and Interpreters）により認定を受けた通訳者7人へのインタビューを通して、ビジネス場面でのダイアログ通訳において、通訳者がAUSIT（Australian Institute of Interpreters and Translators）の倫理規定に合致しない行動を取る場合があることを明らかにしている。「公平性」に関して、通訳サービスを受けるクライアントとの心理的距離などの関係から、実際の通訳場面での公平性維持は簡単ではないと答えている通訳者がいること、また、通訳費用の負担者に対してより忠実になるのは当然とする通訳者がいることが示された。

「正確性」に関しては、クライアントからの要望としてポイントだけ訳したり、重要な部分だけ訳したりということがあり、「正確性」の規範からは結果的に逸脱してしまう場合を挙げた通訳者がいた。またわかりにくいことを説明を加えながら訳すということもよくおこなわれるようである。瀧本（2006）は「通訳者は常に、クライアントが何を求めているかを的確に判断し、結果的には倫理規定に反することになっても、クライアントの期待に応えるような行動をおこなっていることをみて取ることができる」（p. 150）と述べている。そしてその「動機は、ビジネス分野においては、円滑なコミュニケーションが不可欠であるという、通訳者の認識に起因している」（瀧本, 2006, p. 150）とする。

また、AUSITの倫理規定には「正確性とは、起点言語のメッセージまたは原文の内容および意図を省略、歪曲せず、そのまま保持し、メッセージを最適かつ完全な形で目標言語に伝達することである。」（Code of Ethics, 5. Accuracy）とあるが、インタビューに応じた通訳者は不適切と思われる表現の訳出は「しない」、「編集する」、「異なった表現にする」、「そのまま言っていいかクライアントに確認する」など、かなり神経を使っている。「倫理規定に従い適切でない表現を自動的にそのまま訳すとした通訳者は皆無」（瀧本, 2006, p. 151）だったという。

コミュニケーション摩擦場面における日中通訳者の規範意識について考察している前述の朱（2019）のアンケート調査では、109名（全員が中国人）のうち、104名が正社員として企業に勤務していること、また全員が社内で通訳・翻訳以外の業務も担当していることが示された。通訳場面や通訳をする相手も、会議などフォーマルな場面から同僚間の会話などインフォーマルな場面と多岐にわたる。朱（2019）ではコミュニケーション摩擦になりうる表現を、「あいまい表現の通訳」、「暴言・コンフリクトが起こりうる表現」、「分かりにくい発話」、に分けて分析をおこなっている。あいまい表現の通訳に関しては、あいまいな部分を明確にして通訳する明示化が多く選ばれており、通訳者が仕事を効率的に進め、誤解を無くすために行動している傾向がある、としている。暴言・コンフリクトが起こりうる表現に関しては、表現を和らげる方略である省略が

最も多く選択されている。朱（2019）では、これは通訳者が人間関係を重視し、コンフリクトを避けようとして行動しているためであろうとしている。インタビュー調査はアンケート協力者のうちの4名に対しておこなわれており、暴言・コンフリクトが起こりうる表現に対する通訳では、ある通訳者は「通訳者という枠から飛び出し、社員としての方法を提案した」（朱, 2019, p. 125）という。分かりにくい発話についてのインタビュー調査では、4名のうち2名が「原発話が分かりにくいと、会話が円滑に進められず、仕事の効率が悪くなるため、通訳者は原発話を編集して通訳する」（朱, 2019, p. 126）と答えている。朱（2019）はその考察において、「通訳者のみならずひとりの社員として摩擦・コンフリクトを回避する行為を積極的な営みにつながると捉え」（p. 127）、「正社員という長期雇用の形で勤務しているため、通訳者、そしてひとりの社員という二重のアイデンティティを持っているが故に、社員間の友好関係を保つことを常に意識しているのではないか」（p. 127）としている。

3. 現代における主要な通訳形式

現代における主要な通訳形式には会議通訳、コミュニティ通訳、ビジネス通訳が挙げられるが、それぞれの通訳形式の境界はあいまいである。Pöchhacker（2004）は「会議通訳」を、「二者間通訳（bilateral interpreting）」または「対話通訳（dialogue interpreting）」と対比して、様々な国や機関の代表が参加する会議などで行われる多者間のコミュニケーションである、とする。しかし国際会議通訳は「多国間の外交にとどまらず、言語的境界を超えて調整と交流を含むあらゆる活動の分野へと広がっている」とし「特定の制度的な場や文脈とはもはや関連がない」（Pöchhacker, 2004, 原著p. 16 筆者訳）と述べる。そのうえで、会議通訳が他と区別されるのは、相互作用が「会議」という特定の形式の中で行われるからであるとする（Pöchhacker, 2004）。

コミュニティ通訳は水野（2013）によれば、「司法、医療、行政、教育など、その国の言語を解さない移民や外国人の日常生活に関わる通訳」のことで、「会議通訳、外交通訳、ビジネス通訳などと対比して用いられる用語であり、聴覚障がい者のための手話通訳もこのカテゴリーに入る」（p. 312）。しかしその定義については水野・内藤（2018）がその著書『コミュニティ通訳』の中で、「通訳者が必要とされる生活の場面があまりにも多岐にわたっていることから、コミュニティ通訳分野の範囲を明確に区切ることは非常に難しい」（p. 28）と述べている。定義が明確に定まらない分野ではあるが、地域に暮らし、その地の言葉を解さない外国人や聴覚障がい者など情報弱者のための通訳サービスを提供するのがコミュニティ通訳者である、とは言えるだろう。水野・内藤（2018）はさらに、コミュニティ通訳者には強い精神力が必要である、と述べ

ている。司法にしる、医療にしる、行政にしる、人の不幸やトラブルに直面することがあるからである。トラウマになり精神のバランスを崩してしまう通訳者もいるという。そのようなことに陥らないためにも「自分と通訳対象とのあいだに線引きをし、現場で起こっていることを客観視する能力」(水野・内藤, 2018, p. 184)が必要である。

会議通訳とコミュニティ通訳を比較したとき、顕著なのはその通訳形態の違いである。会議通訳は同時通訳が多く、コミュニティ通訳は対話通訳である。しかし、この違いに関して鳥飼(2007)は『「会議通訳」と言っても、通訳する場合は会議だけとは限らず、同時通訳に限定されるわけでもない』(p. 358)と述べる。会議通訳でも対話通訳はおこなわれるし、同時通訳だけでなく逐次通訳もおこなわれる。ブースに入って遠くから通訳をおこなうことになれば「見えない存在」になるし、話し手の横で「見える存在」になる場合もあるのである(鳥飼, 2007)。そして、通訳の「透明性」や「不可視性」は物理的に見えないかどうかというより、通訳者の内的なスタンスやポジショニングに関する意識であり、直接関連させて考えるのは誤解を招く可能性がある、と述べている(鳥飼, 2007)。しかし、通訳者の内的スタンスを考えてみると、やはりここに会議通訳者とコミュニティ通訳者の意識の大きな違いが見られる。水野(2005)は、各分野の通訳の倫理規定を比較した論文の中で、医療通訳に特有のものとしてアドボカシーに関する倫理に言及している。アドボカシーとは「擁護」という意味で、「通訳行為以外に、関係者(おもに患者)の代わりに声を上げてその人のために何かをする」(水野・内藤, 2018, p. 67)ということである。つまり、通訳者が発せられた言葉を別の言語に置き換える通訳を越えて、関係者のために行動する必要があるということである。コミュニティ通訳者の通訳対象者へのこのような寄り添い方は会議通訳者のそれとは異なると言える。会議通訳者の重点は、会議参加者相互の対等なコミュニケーションを助けることに置かれるからである。

ビジネス通訳とは「企業での会議や商談、研修などの通訳業務を指し」(平塚, 2013, p. 58)、その業務には「全社会議(株主総会、取締役会、経営戦略会議など)のほか、定期的開催される部門会議(IT・システム開発会議、商品開発会議、生産会議など)や社員間の小規模なミーティングなどがある」(河原, 2013, pp. 314-315)。ビジネス通訳は「会議自体の難易度よりも、企業ごとの文化や慣習というコンテキストが通訳の質を左右するのが特徴」(平塚, 2013, p. 58)である。企業の機密漏洩防止が重要な場合や業務内容に精通した通訳者を求める場合、正社員や契約社員として通訳者を雇用する(平塚, 2013)。ビジネス通訳の現場では高橋・木村(2018)が言うように、通訳者本人もその場の構成員になり、コミュニケーションに積極的に参加することがある。通訳対象者がそれを通訳者に求める場合があり、通訳者もそれに応えようと行動するからである。

4. 勤務先の社内通訳の特徴

社内通訳はビジネス通訳のなかの雇用形態のひとつであり、筆者もひとつの会社に社員として雇用されている。以下に筆者が勤務する会社において筆者自身が感じている社内通訳の特徴の一部を挙げる。

- ・長期(筆者の場合、通訳・翻訳を専門に担当する部署に勤務して14年になる)にわたり雇用されているので、継続的な人間関係の中で通訳業務をおこなうことになり、感情面での調整が必要になる場合がある。
- ・プロジェクトの経緯や社内の事情が共通理解されていると見なされている。
- ・会議体、通訳の方法(逐次通訳か同時通訳か)にもよるが、多くは誤訳があったらその場ですぐに訂正が可能なが多い。もしくは、会議が終わってから当事者に訂正を入れることは比較的容易にできる。
- ・通訳・翻訳チームの採用条件に、通訳の専門的訓練を受けていることという項目はなく、実務試験に受ければ採用に至る可能性がある。

これらの点を踏まえ、次に筆者から見た社内通訳の実情を整理し、フィールドノートに記録されている事例を挙げて、他の通訳形式との比較や、これまで概観してきた倫理観、役割論と照らし合わせ分析をおこなう。

4.1 通訳者の役割研究から分析した社内通訳

記述フィールドノートの記述の中で、通訳者の役割研究との関連が考えられるものには以下が挙げられる。

1. 通訳者が発言者の言葉に情報を足したり、冗談を言ったり、あるいは大勢が一斉にしゃべろうとする会議を仕切ったりする。
2. 日本語の聞き取りにはほぼ問題がなく、話すこともある程度はできる外国人スタッフに、念のために会議にいてほしい、と言われる。
3. そのまま通訳してしまうと対立が起ってしまうと思われる発言者の言葉をやわらげて通訳する、あるいはその部分の通訳をしない。

1.は高橋・木村(2018)の研究で言及されている「より積極的なその場の構成員」(p. 105)であろうとする態度である、と言える。

2.は高橋・木村(2018)が言及している心理的負担の軽減のために通訳者が使われていると考えられる。

3.には朱(2019)や、瀧本(2006)の研究でも明らかになった、ビジネス通訳者が円滑なコミュニケーションを重視する態度が見られる。

4.2 社内通訳者の倫理観

朱(2019)の研究で言及されているように、通訳の専門的訓練を受けずに企業内で通訳をおこなっている通訳者の倫理観は、実務を通して学習されると考えられる。そ

れをふまえて筆者の場合を考えてみると、筆者も通訳学校に通ったことはなく、「通訳は黒子である」という規範意識に関して、どこかで読んで何となく頭に残っていたものを「それが通訳である」と思い込んでいただけにすぎない。通訳・翻訳を専門に担う部署で仕事を始めた当初は、プロ通訳者がはじめに習うと言われる、一人称を使つての逐次通訳さえままならず、文化的な側面を考慮する余裕もなかった。ある電話会議で、アメリカのクライアントがテストプロジェクトに対して称賛の言葉を述べたとき、日本人側は謙遜の意味も含め「本番は同じようにはできないかもしれません」と返答した。その会議に通訳として参加していた筆者はそれをその通りに訳出したが、後にクライアントから「日本人チームは不安を口にしていたが、本制作を任せて大丈夫なのか」とプロデューサーに懸念を示す電話がきたと聞かされた。プロデューサーに筆者がどのように訳出したのかと問われ、言われた通りに訳出したはずだと伝えたが、その時に文化の違いを無視した訳出は、プロジェクトの失注などで会社に損害を与えかねない失敗につながることもあるのだと痛感した。

平塚(2014)は3名の中国語母語話者の語りから、通訳の経験を積み重ねていくことによって、文化的な摩擦を回避しようとする消極的な姿勢から、円滑なコミュニケーションを促進しようとする積極的な姿勢に変化していくことが示されたと述べているが、筆者の場合も、長年社内通訳として仕事をする中で、人間同士のコミュニケーションを円滑にすることを重視する通訳スタイルを身につけてきたと感じる。社内の英語話者は多くが非英語母語話者であり、英語の運用能力も様々であることから、自分の訳出そのものも、その人の英語運用能力によって変化させている。また、激しい言い方がされて、そのまま訳出してしまうと言いつ争いになってしまうと思われる場合は、言葉をやわらげて訳出したりもする。それは例えば、AUSIT(オーストラリア翻訳者・通訳者協会)の倫理規定に定められている「起点言語のメッセージまたは原文の内容および意図を省略、歪曲せず、そのまま保持し、メッセージを最適かつ完全な形で目標言語に伝達すること」(Code of Ethics, 5. Accuracy)が実践できていないことになるのかもしれないが、社内の人間関係を良好に保つことにはつながっていると考える。

4.3 文化的な差やジェンダー問題

フィールドノートには文化の差やジェンダーの問題を考慮して訳す必要があると感じたという記述もいくつかあった。

1. アメリカでは有名だが、日本ではあまり知られていないテレビドラマのキャラクターの名前が出された時
2. 単なる身体的特徴に言及するだけでなく性差別的な表現がなされた時

1.の場合、それがどのようなドラマでどのようなキャラクターが登場するのかなどの説明を加えて通訳することがあ

るが、これは通訳者が、高橋・木村(2018)が言及している「相互行為の担い手や同伴者や情報源」(p. 105))として機能していると言える。

一方、2.の例はアニメーションの制作現場での通訳で難しいことのひとつでもある。ジェンダーの問題として「女性的」、「男性的」という表現はCGでキャラクターを作成する中で頻繁に出てくるが、今回のフィールドノートにも通訳中に「このキャラクターはもっと隠れ巨乳にしてください」や「もっとオネエっぽくしてください」などの表現が使われ、筆者自身が不快に感じたという事例もあった。キャラクターの身体的特徴や性格を作り上げていく際に、このような言葉を使うと日本人には非常にわかりやすいため、言っている本人は特に差別用語と思って使っていないことも多い。ただし、受け取った側が差別と感じる場合もあるので、言葉の選び方は慎重にならざるをえない。

類例として、筆者以外の通訳者が話していたことで、「女の子走り」をどう訳すかという問題もあった。例えば「Run like a girl」のような訳し方は、アメリカでは完全にジェンダー違反になるという。他に「あの女の子かわいいね」と言った日本人に対してアメリカ人が不快感を示した事例もあり、社内でも日本とアメリカでのジェンダー問題の捉え方の違いが浮き彫りになる場面がある。

4.4 社内通訳者のアイデンティティ

フィールドノートには、社内通訳者のもっとも顕著な特徴として、長期間の会社生活の中での人間関係に関する記述と、社員と通訳者という二重のアイデンティティに関する記述があった。

1. 日常親しくしているある外国人スタッフに対してネガティブな話を通訳しなくてはならなかった際、口ごもりながらの通訳になってしまった。
2. 一般社員には聞かせたくないと思われる話がされており、通訳として出ている会議から途中退出を求められた。
3. 通訳として参加していた会議で、議題についての意見を求められた。

1.は、同僚としてその人と自分の間に時間をかけて構築された人間関係が壊れてしまうのではと懸念する様子が見て取れる。

2.と3.は、自分という存在が通訳者としてではなく社員として会議の中で意識されているのがわかる。筆者が毎日勤務する社員であるがゆえに、単なる一通訳者としてその場ですべての情報を開示することを躊躇したり、逆に毎日顔を見る社員だからこそ、通訳者としてではなく、一スタッフとして意見を求めたりすることがあるのだと考えられる。

4.5 社内通訳者が感じる心理的な負担

フィールドノートの中には精神的に負担を感じている記述もいくつかあった。

1. 人間的なことが話される会議
2. 通訳対象者の感情が高ぶることがあり、通訳者の感情も高ぶってしまった。

これらに関しては、水野・内藤（2018）がコミュニティ通訳者の精神的強靱さの必要性および通訳対象者と距離を置くことの重要性を述べているが、通訳対象者とは毎日のように同じ社内で顔を合わせるの、その都度記憶がよみがえることにもなる。これは社内通訳ならではの特徴と言える。

5. まとめと新たな視点

通訳の役割論や倫理観そして様々な通訳形式を通して、社内通訳の役割を考えてきたが、社内通訳がより積極的にコミュニケーションに関与する役割を持つとした場合、その役割は、オズグッド & シュラムの円環モデル（Schramm, 1955, p. 8）に通訳を入れた8の字モデルで説明できる。

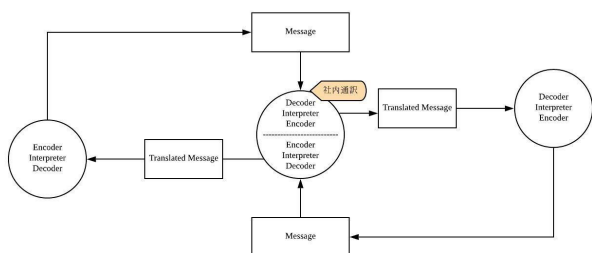


図1 通訳者を中心に組み込んだ8の字のコミュニケーションモデル

オズグッド & シュラムのモデルでは、メッセージの受け手がそのメッセージをDecode（解読）し、Interpret（理解、解釈）し、そして今度は発信者としてメッセージをEncode（符号化）して発信する。8の字モデルで中心に位置する社内通訳者は、コミュニケーションのハブとなり、発言者のメッセージを受け取り、解読し、さらにそれを分析、理解し、今度は発信者としてメッセージを符号化して発信する。日本語、英語それぞれのメッセージは必ず通訳者を通り、その通訳者が通訳場面に応じてそのメッセージを理解、解釈し、時には調整もして発信するのである。

このように、社内通訳者はコミュニケーションのハブとして調整役も担いながら通訳業務をおこなうが、新型コロナウイルスの流行で推奨されたリモートワークでは、勤務先の社内通訳者の関わり方に以下のような変化が生じてきた。

1. 同時通訳の割合が増え、より言葉の橋渡しとしての通訳業務の比重が高くなった。
2. Zoomの言語通訳機能を使って同時通訳がおこなわれるようになると、これまで社内通訳者であるがゆえに

できていたことができなくなった。

1.について、まず同時通訳の割合が増えた理由は、各自が自分のコンピュータからオンライン会議につながるの、通訳者の声を必要な人にだけ届けることができるようになった、ということがある。また、逐次通訳より同時通訳の方が会議の時間を短くすることができるため、リモートワーク開始後から増えた会議の数をこなすため、同時通訳を求める人が増えた、という事情もある。しかし、通訳の形態としては同時通訳の方がより即時性を求められるので、通訳者としては発せられた言葉をそのままう一方の言語に置き換えていくことに集中せざるをえない。同時通訳が増えて、専門的な訓練を受けていない自分の技術が未熟であることを実感する機会が増えたことによる心理的負担に加え、訳抜けや誤訳に気付いたとしても、会議の流れを止められず、コミュニケーションを成立させることに重点を置くことができない会議が多くなったことも心理的負担の増加の原因になっている。

2.について、筆者の勤務先の会社でリモートワーク開始直後は、同時通訳を入れる際に、会議本体用のラインと同時通訳用のラインの2つを用意して対応していた。通訳が必要な人はその両方に入り、自分の発言は会議本体用のラインでおこない、通訳を聞く場合は同時通訳用のラインで聞いていた。その後、言語通訳機能が搭載されたZoomが導入され、Zoomによる同時通訳が提供されるようになった。通訳者の操作としては、言語の切り替えボタンを押すだけでいいので、ラインを2つ引いていた時よりは楽になったと言える。

社内のオンライン会議では、カメラをつけてお互いの顔を見ながら話すことが推奨されてはいるが、画面に映すことのできる数は限られており、通訳者が映っているとは限らない。そのため、会議参加者の人数が増えるほど通訳者の存在感は薄れ、社内通訳者が、2.1で分析したような会議の参加者や構成員というより、より黒子的な存在に近くなったと感じられる。

さらに、4.2で言及した、これまでの実務を経て醸成してきた人間同士のコミュニケーションをより重視する自分の通訳スタイルを發揮しづらくなったとも感じる。技術の未熟さ以外にも、即時性への対応や音質の悪さなども加わり、耳に入ってきた単語を解釈するために使わなくてはならない時間がとても増えたからである。

Zoomで会議がおこなわれる際、指定のURLに入ると、そこにいる人たちとは会話ができる。会議の主催者が通訳設定をおこなうと、通訳者には目標言語の選択肢（日本語か英語）が表示され、その状態になると今まで会話できていた人たちとはそのままの状態では会話が続けなくなる。会議参加者が自分が聞きたい方の言語のチャンネル（日本語か英語）に合わせ、そのチャンネルに通訳者が話せば通訳者の声が聞こえる。通訳設定されたたん、自分の声が全体には届かなくなるので、通訳者としては疎外感を覚えることがある。社内通訳者のこの心理状態は、4.4

で言及した社内通訳者の二重のアイデンティティに関係しており、様々な現場に日々向くプロ通訳者とは異なると考えられる。

会議全体への発言ができないため、訂正や聞き返しもしづらくなり、また、追加情報を入れての通訳もおこなえなくなった。一方通行の通訳が多いため、調整役としての役割も担えない。しかし、これまでは無意識にこなしてきたこれらの役割が、できなくなったことにより意識されるようになったとも感じる。今後もリモートの環境は続くと思われ、そのなかで、社内通訳者が担っている役割はより鮮明になっていく可能性がある。それについては継続して観察していきたい。

文 献

- 河原清志 (2013) 「ビジネス通訳」石井敏・久米昭元 編集『異文化コミュニケーション事典』(pp. 314-315) 春風社。
- 朱藹琳 (2019) 「コミュニケーション摩擦場面における通訳者の規範意識：中国の日系企業を中心に」『通訳翻訳研究への招待』第20号, 115-140
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol20/No_20-007-Zhu.pdf (2020年8月17日参照)。
- 高橋絹子・木村護郎クリストフ (2017) 「だれがいつどこで何のために通訳を使うのか：日英ビジネス通訳の事例から」『通訳翻訳研究への招待』第17号, 1-19
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol17/No_17-001-Takahashi-Kimura.pdf (2020年12月17日参照)。
- 高橋絹子・木村護郎クリストフ (2018) 「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか? : 日英ビジネス通訳の事例から」『通訳翻訳研究への招待』第19号, 91-108
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol19/No_19-005-Takahashi-Kimura.pdf (2020年12月17日参照)。
- 瀧本真人 (2006) 「AUSIT倫理規定と通訳者の行動：ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合」『通訳研究』第6号, 143-154 (2020年12月17日参照)。
- 武田珂代子 (2013a) 「通訳者の役割とアイデンティティ」鳥飼玖美子 編著『よくわかる翻訳通訳学』第4部第12章第4節 (pp. 162-163) ミネルヴァ書房。
- 武田珂代子 (2013b) 「翻訳者・通訳者の倫理規定」鳥飼玖美子 編著『よくわかる翻訳通訳学』第3部第4章第3節 (pp. 48-49) ミネルヴァ書房。
- 辻和成 (2006) 「日本のビジネス通訳についての一考察：大手企業のグローバル人事を背景として」『通訳研究』第6号, 129-142
http://jaits.jpn.org/home/kaishi2006/pdf/07-15%20Tsuji_Final.pdf (2020年12月17日参照)。
- 鳥飼玖美子 (2007) 『通訳者と戦後日米外交』みすず書房。
- 平塚ゆかり (2013) 「ビジネス通訳」鳥飼玖美子 編著『よくわかる翻訳通訳学』第3部第6章第2節 (pp. 58-59) ミネルヴァ書房。
- 平塚ゆかり (2014) 「日中通訳者の通訳規範意識とその形成要因」立教大学博士論文 (2015年学位授与)
https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=11347&item_no=1&page_id=13&block_id=49 (2019年12月17日参照)。
- ポエヒハッカー, フランツ (2008) 『通訳学入門』(鳥飼玖美子 監訳) みすず書房。
- 水野真木子 (2005) 「各種通訳倫理規定の内容と基本理念：会議、コミュニティー、法廷、医療通訳の倫理規定を比較して」『通訳研究』第5号, 157-172
http://jaits.jpn.org/home/kaishi2005/pdf/07_mizunomakiko_final.pdf (2019年12月10日参照)。
- 水野真木子 (2013) 「コミュニティー通訳」石井敏・久米昭元 編集『異文化コミュニケーション事典』(pp. 312-313) 春風社。
- 水野真木子・内藤稔 (2018) 『コミュニティー通訳：多文化共生社会のコミュニケーション』みすず書房。
- 溝口良子 (2009) 「通訳者の役割モデルの研究：6つのスタイルと2つの機能」『通訳翻訳研究』第9号, 71-86
<http://jaits.jpn.org/home/kaishi2009/pdf/05-mizokuchi.pdf> (2020年12月17日参照)。
- Angelelli, C. (2004) *Revisiting the Interpreter's Role: A study of conference, court, and medical interpreters in Canada, Mexico, and the United States*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- AUSIT (Australian Institute of Interpreters and Translators) 倫理規定・行動規範
https://ausit.org/wp-content/uploads/2020/02/Code_of_Ethics_Japanese-translation.pdf (2020年12月14日参照)。
- Goffman, E. (1981) *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Pöchhacker, F. (2004) *Introducing Interpreting Studies*. London: Routledge.
- Schramm, W. (1955) How communication works. In W. Schramm (Ed.), *The process and effects of mass communication* (pp. 3-26). Urbana: University of Illinois Press.